The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	対人コミュニケーション認知のメカニズムに関する実験社会心理学的研究 : 行為者と観察者の視点の違いに基づく考察
Author(s)	木村, 昌紀
Citation	大阪大学, 2007, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/47176
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【1】

氏　　名	木（き）　村（むら）　昌（まさ）　紀（のり）
博士の専攻分野の名称	博　士（人間科学）
学　位　記　番　号	第　２０７９６　号
学 位 授 与 年 月 日	平成 19 年３月 23 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第４条第１項該当 人間科学研究科人間科学専攻
学　位　論　文　名	**対人コミュニケーション認知のメカニズムに関する実験社会心理学的研究－行為者と観察者の視点の違いに基づく考察－**
論 文 審 査 委 員	（主査） 教　授　大坊　郁夫 （副査） 教　授　中村　敏枝　　教　授　釘原　直樹　　助教授　篠原　一光

論　文　内　容　の　要　旨

第１章　研究の理論的背景

本論文の目的は、「行為者」に注目してきた従来の対人コミュニケーション研究に、「観察者」の視点を導入することで、より包括的な検討を試み、理論的貢献を目指すことである。

従来の研究は、情報交換の効率性や親密な関係の構築という観点から対人コミュニケーションの「行為者」に焦点を当てていた。しかし、社会という文脈の中に位置づけた場合、対人コミュニケーションという現象は話者間で完結するものではなく、周囲の「観察者」に対しても、豊富な情報を発信している。われわれは対人コミュニケーションの行為者であると同時に観察者でもある。観察者としての対人コミュニケーション認知は、周囲の人間関係を知る上での情報的基礎であり、対人トラブルの予防や早期発見、対処行動に影響するため、社会的適応基盤であると考えられる。

それでは、話者と観察者は同じように対人コミュニケーションを認知しているのであろうか。話者と、観察者の間には、利用可能な情報や動機づけ、情報処理の違いが存在することから、対人コミュニケーションに関する認知の相違が生じる。欧米の先行研究から、活発なコミュニケーションをみると、うまくいっていると観察者が判断してしまう「表出性ハロー効果」が報告されている。ただし、高コンテクスト文化の日本においても、この「表出性ハロー効果」がみられるかは分からず、表出性と密接に関連する話題の感情価についても考慮しなければならない。

さらに、話者間の関係性が対人コミュニケーションに反映することが知られているが、観察者が対人コミュニケーションを認知することによって話者間の関係性を本当に推測しているのかを確認する必要がある。もしそうであるなら、話者と観察者では、対人コミュニケーションだけでなく、関係性についての認識が異なっている可能性がある。同じ集団にいても、その中の人間関係の認識が異なれば、社会生活を円滑に営む際の妨げになると思われる。

そして、話者と観察者による対人コミュニケーション認知の相違が存在するなら、社会的適応基盤であると考えられる、観察者としての対人コミュニケーション認知の判断精度を向上させなければならない。本論文では、観察者としての対人コミュニケーション認知を、練習によって向上可能な社会的スキルの一つとして位置づけ、その判断精度を向上させるための具体的示唆を得るため、話者と観察者による対人コミュニケーション認知の基礎的メカニズムの解明を試みる。

第２章　行為者と観察者による対人コミュニケーション認知の相違

第２章では、話者と観察者による対人コミュニケーション認知の基礎的メカニズムについて、文化的観点及び感情的観点から精緻化した。まず、自己高揚動機によって、話者は自身の行ったコミュニケーションを高く評価する一方、観察者は他者同士のコミュニケーションを低く評価する傾向があった。また、高コンテクスト文化である日本においても、活発なコミュニケーションをみると、うまくいっていると観察者が判断してしまう「表出性ハロー効果」がみられた。このことは、対人コミュニケーション認知のメカニズムの普遍性を示すといえ、話者は利用可能な情報が多く、詳細な情報処理を行うため「表出性」の影響を受けないが、観察者は利用可能な情報が少なく、大まかな情報処理を行うため、顕在性の高い「表出性」の影響を受けるものと考えられる。そして、観察者は、活発なポジティブ感情エピソードの会話のほうが不活発なネガティブ感情エピソードの会話よりも、うまくいっていると判断してしまう一方、話者は話題の感情価にかかわらず認知を行っていた。その結果、観察者による対人コミュニケーション認知の判断精度は、ポジティブ感情エピソードのほうがネガティブ感情エピソードの会話よりも高くなっていた。つまり、話者と観察者による対人コミュニケーション認知の相違は、話題の感情価によって変動するのである。

第３章　関係性推測のための対人コミュニケーション認知

第３章では、話者と観察者による対人コミュニケーション認知の基礎メカニズムについて、対人関係の観点から精緻化した。第２章において、未知関係にある話者同士の会話を、話者と面識のない観察者がみるという実験状況でみられた、「表出性ハロー効果」が、友人関係にある話者同士の会話を、話者と面識のない観察者がみるという第３章の実験状況でも確認された。また、観察者は対人コミュニケーション認知を基にして、話者間の関係性を推測していることが示された。このことは、「表出性ハロー効果」が理論的に拡張されたことを意味する。すなわち、観察者は、活発なコミュニケーションをみると、そのコミュニケーションがうまくいっていると思うだけではなく、話者間の関係性も良好であると判断してしまうのである。観察者として対人コミュニケーション認知を行うことは、周囲の対人関係の理解につながる社会的適応基盤であることが確認された。しかし、話者と観察者では対人コミュニケーションだけでなく、関係性についての認識にも相違が存在することから、より判断精度を向上させるための対処策について考える必要性が示唆された。

第４章　対人コミュニケーション認知の手がかりとしてのシンクロニーの有効性の検討

第４章では、観察者による対人コミュニケーション認知の判断精度を向上させるため、インタラクショナル・シンクロニーの手がかりとしての有効性を検討した。シンクロニーは、対人コミュニケーションにおいて話者間の行動が連動し、類似化していくことをさす。表出性を手がかりにすると、話題の感情価によって判断精度が影響を受けてしまう。そこで、話題の感情価にかかわらず、対人コミュニケーションでみられる手がかりとしてシンクロニーに注目した。擬似シンクロニー実験パラダイムの結果、ポジティブ感情エピソードでもネガティブ感情エピソードの会話場面でもシンクロニーが知覚されることが示された。そこで、対人コミュニケーション認知の手がかりとしてシンクロニーに注目させた場合に、観察者の判断精度が向上するかを検討したが、効果はみられなかった。一連の研究結果から、観察者の対人コミュニケーション認知には、シンクロニーのような「話者間の行動パターンの連動性」も影響するものの、より強い影響力をもつのは、「表出性」であることと、観察者に教示する場合、妥当な手がかりを具体的に伝えなければならないことが示唆された。

第５章　社会的スキルとしての対人コミュニケーション認知メカニズムの解明

第５章では、観察者による対人コミュニケーション認知を社会的スキルの一つとして位置づけ、その妥当性を検証した。その上で、レンズモデル分析によって、話者と観察者による対人コミュニケーション認知の特徴を抽出して判断精度向上のための具体的示唆を得た。

結果は以下のとおりである。まず、判断の易しい活発な会話では、対面交渉能力の高い者は、低い者に比べて、対人コミュニケーション認知の判断精度が高かった一方、判断の難しい不活発な会話では、対面交渉能力による違いはみられなかった。また、表出性の高いポジティブ感情エピソードの会話では、対面交渉能力の高い者は、低い者に比

べて、対人コミュニケーション認知の判断精度が高かった一方、表出性の低いネガティブ感情エピソードの会話では、対面交渉能力による違いはみられなかった。これらの結果から、判断し易い課題では、対面交渉能力の違いが観察者としての対人コミュニケーション認知に反映するが、判断し難い課題では反映されないことが示された。そして、観察者による対人コミュニケーション認知は、表出性の高い会話では、試行数に伴い判断精度の向上がみられた一方、表出性の低い会話では、ただ試行数を増やすだけでは判断精度の向上に限界があることが示唆された。最後に、レンズモデル分析の結果から、話者の会話に対する満足感が高いときの対人コミュニケーションの特徴と、観察者が用いている対人コミュニケーションの手がかりが明らかとなった。これらを観察者にフィードバックすることにより、対人コミュニケーション認知の判断精度を更に向上させることができると思われる。

第６章　総括的討論：社会へと開かれたコミュニケーション

対人コミュニケーションの行為者と観察者という枠組みは、両者の溝を浮き彫りにするかたちになった。人は一人で生きることができず、対人コミュニケーションという行為を通じて他者とのつながりを求める。しかし、その観察者は、話者と同じように対人コミュニケーションを捉えているわけではない。他者と分かり合おうとする対人コミュニケーションという行為は、その行為のうちに、観察者との乖離を包含していたのである。対人コミュニケーションの観察が、話者との認識の差異を生み出す不毛な行為であるなら、われわれは観察者としてそれを避けるべきなのであろうか。

本結果から、観察者は対人コミュニケーション認知を基にして、話者間の関係性を推測していた。冷淡な傍観者としてそこに存在しようとするなら他者同士のコミュニケーションに配慮する必要はない。だが、周囲で対人トラブルが起きないよう、もし起きたとしても素早く適切に対処できるように他者と積極的に関わっていくなら、対人コミュニケーションを注意深く観察しなければならない。

そして、対人コミュニケーションの観察力は練習によって向上可能である。対人コミュニケーションの行為者と観察者の溝は、それを望むならば埋めていくことができる。話者と観察者による対人コミュニケーション認知のメカニズムを解明していくことによって、認識のズレを生まないための予防策や、たとえズレが生まれたとしても、それは何故なのかをふりかえり、そして歩み寄るための対処策を講じることができよう。われわれは、自らが積極的に対人コミュニケーションを行うべきであるのとともに、積極的に他者のコミュニケーションを観察するべきである。ただし、観察者としての過信は禁物である。「傍目八目」が「対岸の火事」にならないように、対人コミュニケーションの“良き”観察者は、自らの視点を保持しつつ、話者の視点へ歩み寄る姿勢を忘れてはならない。

グローバル化が叫ばれ、社会の流動化と統合がますます進む現代において、視点の多様性が生み出す認識の相違が複雑化している。その中で、本研究が明らかにした、行為者と観察者の視点の違いに基づく対人コミュニケーション認知のメカニズムはその認識の相違を読み解く一助となり、観察者による判断精度の変容可能性は、相互理解への希望となるであろう。

論文審査の結果の要旨

申請者は、「行為者」に注目してきた従来の対人コミュニケーション研究に、「観察者」の視点を導入することで、より包括的な理論構築を目指すことに着目し、組織的に研究を展開している。

従来の対人コミュニケーション行動についての研究では、情報交換の効率性や親密な関係の構築・展開に焦点を合わせたものが多く、当該者の関係や社会的脈絡からさらに当該者を取り巻く（直接の相互作用者ではない）傍参与者・観察者を含んだ研究は少ない。社会という文脈の中に位置づけた場合、対人コミュニケーションという現象は話者間で完結するものではなく、周囲の「観察者」に対しても、豊富な情報を発信している。われわれは、コミュニケーション行為者であると同時に観察者でもある。「観察者」としての対人コミュニケーション認知は、幾重にも拡がる対人関係を知る上での情報的基礎となる。

話者と、観察者の間には、利用可能な情報や動機づけ、情報処理の違いが存在することから、対人コミュニケーシ

ョンに関する認知の相違が生じる。このような前提のもとに、コミュニケーション行動についての当事者と観察者（非当事者）の認知を比較検討することによって、対人コミュニケーションについての認知的構造、関係を明らかにすることを本申請者は研究の目的としている。

具体的には、１）低コンテクスト文化である欧米の研究では、活発なコミュニケーションを見ると、適応的であると観察者が判断する「表出性ハロー効果」が、積極的なコミュニケーションが必ずしも好ましいとはし難い高コンテクスト文化の日本においても認められるのか。

２）当事者ではない観察者が対人コミュニケーションを認知することによって話者間の関係性を本当に推測しているのか、そこには視点の違いの影響がどう働くのか。

３）対人コミュニケーションに見られるシンクロニーが認知にどう影響するのか。

４）観察経験による認知精度の向上がどのように見られるのか。

について、それぞれに綿密な手順で実験・調査を行い、結果の検討を行っている。

得られた主要な結果は、①日本でも観察者は、活発なコミュニケーションをみると、そのコミュニケーションがうまくいっていると思うだけではなく、話者間の関係性も良好であると判断する。②ポジティブ感情エピソードのほうがネガティブ感情エピソードの会話よりも判断精度が高い（一種の錯誤）。③観察者の認知に対してシンクロニー自体への注目の効果よりも観察者の表出度の効果が大きい。④判断し易い活発なコミュニケーション事態では、対面交渉能力の違いが観察者としての対人コミュニケーション認知に反映するが、不活発な事態ではその効果は見られない。

このような結果を踏まえ、申請者は、レンズモデルを基礎的で総合的な視点として、行為者のコミュニケーション行動とその行動についての自らの認知と観察者の認知との相互関係を照合させることを試みている。話者の会話に対する満足感が高いときの対人コミュニケーションの特徴と、観察者が用いている対人コミュニケーションの手がかりが異なることが示されている。これらを観察者にフィードバックすることが、対人コミュニケーション認知の判断精度向上に結びつくことを示唆している。

複数の実験や調査を精力的に行い、多くの要因が関与する会話コミュニケーションの認知について、得られた知見から適宜必要な要因を絞り込み、当初の目的である会話行動の独自性の特定に向けて、実験および調査が一つの流れとして展開されている。ただし、会話コミュニケーションには多くの要因が関与しているので、今後は本論文で扱っていない要因について検討を進めることで、本論文の成果の更なる一般化を進める必要がある。また、この基礎的研究の成果を踏まえて、コミュニケーション行動の認知ーそこからより有効なコミュニケーション行動のスキル向上へと発展させていくことが期待される。本論文の研究成果は説得力のあるものである。また、得られた成果および申請者の研究への取り組みから、今後の更なる研究展開が十分に期待されるものと考えられる。

多様な研究の展開、理論的統合の調和のとれた論究は、博士（人間科学）の学位授与に十分に値するものであると判定された。